第１３回県政ひざづめ談議結果概要

〇実施日時：平成２０年９月１６日　１４：３０～
〇開催場所：小菅村　多摩川源流大学

〔司会〕
皆様、大変お待たせいたしました。
ただいまから知事対話「県政ひざづめ談議」を始めさせていただきます。
私、本日の進行役を務めさせていただきます、県の広聴広報課長、田中でございます。よろしくお願いいたします。
それでは、初めに横内知事からごあいさつをお願いいたします。

〔知事〕
皆様、こんにちは。横内でございます。
今日は皆様方それぞれご用件がおありの中を、こうしてお集まりいただきまして、本当にありがとうございます。「県政ひざづめ談議」といいまして、県の行政について日頃皆様方がお気付きになっていること、あるいはこうしたらいいというようなご意見、そんなことをざっくばらんにお話いただきたいという会合でございます。皆様方のお話の中には、県で出来ること、また出来ないこともあるわけでありますけれども、そういう趣旨の会合でありますから、何でも遠慮なくお話をいただければありがたいと思います。
伺うところによりますと、皆様方の中には、山梨県外からこの小菅村、丹波山村においでをいただいた方もいるということですし、同時にこの地域でＮＰＯ活動とか、あるいは色々なボランティア活動をやっていただいているということも聞いております。この多摩川の源流地域を愛していただいて、そしてこの地域を良くするために努力していただいているということに対して、心からお礼を申し上げます。
皆様方が日頃の活動の中でお考えになっていることを、先程申し上げましたように、ざっくばらんに何でもお話をいただければありがたいというふうに思いますので、どうかよろしくお願い申し上げます。

〔司会〕
ここで本日出席しております県と小菅村と丹波山村の担当職員を紹介させていただきます。
まず、森林計画とか森林保護などを担当しております、県の岩下森林整備課長です。
それから観光振興をはじめ、都市と農村交流の推進などを担当しております堀内観光振興課長です。
それから農業の振興などを担当しております横田農村振興課長です。
また、魅力ある源流のふるさとづくりを推進しております小菅村の青柳総務課長と、丹波山村の坂本総務観光課長です。
本日、小菅村と丹波山村でふるさとづくりなどに携わっておられます方々と「魅力ある源流の郷づくり」をテーマに、農林業の振興でありますとか、観光それから都市との交流などについて意見交換を進めていきたいと思います。是非、忌憚のないご意見をよろしく

お願いいたします。

〔知事〕
　これは多摩源流地域の水ですね。売れていますか。

〔参加者〕
　小菅村で作っています。最近売れ始めました。飲むと１０円小菅村に寄附されるんです。１０円高くしたら売れるようになりました（笑）。

〔知事〕
　高くしたら、そうですか、なるほど。
　このコースターはどこでお作りになっているものですかね。

〔参加者〕
　今回、知事はじめ皆様がいらっしゃるということで、コースターとキーホルダーを作らせていただきました。学生たちが一生懸命作ってくれたので、是非お持ち帰り下さい。
　この教室の壁に使っているものを加工しました。

〔知事〕
　（教室の壁の腰板を見て）これも皆さんが全部おやりになったわけですね。

〔参加者〕
　学生の実習で。

〔知事〕
　実習でね。地域の皆さんから教えていただきながら・・

〔参加者〕
　はい、そうです。
　こちらと、役場にも同じように作ってあります。

〔知事〕
　木の香りがして非常にいいですよね。さすが東京農業大学、たいしたものですね（笑）。

〔参加者〕
　ありがとうございます（笑）。

〔知事〕
　この上流地域に目を付けたのは素晴らしいことだと思いますね。
　若い人というのはなかなか田舎には目がいかないんですけれども、よく目を付けていた

だいたと思いますよね。

〔参加者〕
　来ている学生たちも、都会で育って畑とか田んぼとか何も見たことがないような子たちが多いんですけれども、小菅村に来ますと、日本人のＤＮＡに組み込まれているかのように感激して、故郷だなと思うらしいんですよ。そこで育っているわけではないのに、やはりそう思うらしくて、人との交流もあって、何回でも来たいという学生も今増えてきています。農大にもそういう小菅村のファンがいっぱいおります。

〔知事〕
　そうですか。嬉しいことですよね。またこの小菅村、丹波山村の人たちというのは非常に人間性がいいんですね。山梨県の中でも特に（笑）。

〔参加者〕
　そうですよね。

〔知事〕
　だから非常にうまくいくでしょう。

〔参加者〕
　そうですね。今日も学生さんが一人来ていまして、その学生も言っていたんですが、皆さん本当に家族のように､孫のように接してくれます｡何か私たちがやりたいと言ったら、親身になって、他人事じゃなく自分のことのようにやって下さるので、何回来ても温かい気持ちになって帰ることができます。

〔知事〕
　そうですか。ありがたいことを言っていただいて。
　ほかにも何かお気付きの点がありましたらおっしゃっていただきたいと思います。

〔参加者〕
　知事さんもご覧になっておわかりのように、丹波・小菅は山しかない所なんです。枝打ちのような仕事はいいんですけど、間伐が余り進んでなくて。
　環境公益林事業では、一気に３０％から４０％切らなければ補助金をもらえないというシステムになってまして、一気に切ってしまうと、雪や風で倒れる危険があるかなという感じで、余り木が密生している山は補助金を使うことが出来ないんですよ。

〔知事〕
　環境公益林だとそうなるんですか。３０％、４０％、間伐しちゃうわけですか。

〔参加者〕

間伐しなければ補助対象にならないんですよ。今は伸びはいいんだけど、根が張ってないから、一気に切っちゃうと風当たりが良くなりすぎて、かえってバタバタとやられることになると思うんですよ。

〔知事〕
間伐も余り強く刈らないで、例えば何回かに分けてやらなければならないということですね、何年かに分けてね。

〔参加者〕
２割ぐらいの間伐での補助金はありますか。

〔森林整備課長〕
通常の補助事業ですと、３割前後くらいの間伐だと思いますけれども。

〔参加者〕
３割切っちゃうとちょっと危ないかなと・・。

〔知事〕
３割というと、まあ確かにスカスカになるものだから、強い風が来たりすると倒れる可能性があるということですね。それはそうです。

〔森林整備課長〕
環境公益林というのは、要するに手入れがされていないと、間伐も一回も行われていないということで、本数も多くて、木も細いということなので、早く林の中に光が入るように、通常よりも強めに間伐するということが基本にあります。その辺を基本とするんですが、今言われたように風で倒れてしまっても困りますので、相談しながら進めさせていただきたいと思います。

〔参加者〕
「巻き枯らし間伐」の補助金制度はないんですか。

〔森林整備課長〕
「巻き枯らし間伐」というと、枯れてそのまま立っているという状況になりますので、景観上どうかということや、いつ倒れるか分からないということもあって、山梨県ではあまり進んでおりませんけれども、研究機関等とも研究を行いながら進めさせていただきたいと思います。

〔参加者〕
今森林に力を入れていまして、大学生とかボランティアの人達が間伐体験などもやっていますけどね。そういうふうにしなければこの山もだめになるかなと思って、森林組合も

一生懸命やっているんですけども・・。

〔知事〕
北都留の森林組合ですから、上野原もですか。

〔参加者〕
小菅に事業所がありまして、そこでやっているんです。

〔知事〕
こちらのほうですと、東京都の都有林はきちっとやっているんでしょう。

〔参加者〕
都有林はちゃんと・・。

〔知事〕
だから民有林ですね。民有林だいぶありますからね。しかし間伐は急いでやらなければいけない課題ですよね。だけどもう手一杯ぐらい仕事をやっているんじゃないんですか、そうでもないんですか。

〔参加者〕
時期になると手一杯ですね。今度、国や県で、山に道を入れて、そこの木を間伐しなさいという方針で進めているんです。道を入れると自己負担が３割ぐらいありまして、それはその道を利用して搬出した材木の代金で充てるんですけど、今材価が安いんです。収支もプラスマイナス０か、かえってマイナスくらいになってしまうらしいんですよ。そうすると地主に了解してもらいたくても、なかなか了解も得にくいので、できれば県のほうで、出荷した材に出荷奨励金なんかをつけてもらえればありがたいと思っていますけど。

〔知事〕
出荷奨励金ですね。
切った木はどこに持って行くんですか。東部森林センターとか、あそこですか。それとも奥多摩のほうに・・。

〔参加者〕
奥多摩のほうとか、色々持っていきますね。

〔知事〕
価格もちょっと高くなってきたようだけれども、そうでもないですかね。

〔参加者〕
今年の１１月頃にはちょっと上がるようなことは聞いていますけども。

〔知事〕
間伐した木といっても結構いい木ですものね。

〔参加者〕
そうですね。それを利用しないともったいない気がします。

〔知事〕
それはまったくね。奨励金ね・・。

〔参加者〕
出荷すれば山梨の市場も潤うかなと思って。

〔知事〕
それはそうですね。

〔参加者〕
私は無農薬でいろいろなものを作っているんですけど、今年も猿とか猪、鹿、そういった獣に畑を荒らされてしまいました。網を張ったり色々しているんですけど、なかなか防げなくて困っている状態です。地元の人たちも、今日はうちのとうもろこし全部取られたよとか、かぼちゃ運ばれたよとか言っています。
作物を食べられないようにするためには、山の整備というか、実がなるような木を植えたり、逆にそこから始めないと防げないのかな、という感じもするんです。県でも何かいい方法がありましたら・・。

〔知事〕
電気柵とか。

〔参加者〕
電気柵もあるんです。それでも猿は飛び込むんですね。ですからとうもろこしなんか、今年もたくさん植えて学生さんに提供しようと思いましたら、一本も提供できなくて。猿がみんな運んじゃったようでして・・。

〔知事〕
おっしゃるように、山にどんぐりとか、そういったものを植えて、猿なんかにとって食料があるような森の姿に、もう一度戻して行くのがいいのかもしれませんね。
しかし一回里へ下りてうまい物を食べてしまうと、味をしめちゃいますからね、なかなか山へ戻らないかもしれませんね。

〔参加者〕

多分小菅村だけじゃなくて、山梨県内でも困っているんでしょうね。

〔知事〕
だから管理捕獲と言うんですけど、結局殺すしかないわけですよね、猟友会に頼んで。それはやっているんですけど。小菅もやっているんじゃないですかね。

〔小菅村総務課長〕
やっています。なかなか効果が・・。

〔知事〕
効果がね。猿はなかなか難しいですよね。

〔参加者〕
集団で来ますからね。１匹、２匹じゃなくて。だから一度に大豆だとかみんな・・。

〔知事〕
電気柵は効きませんかね。

〔小菅村総務課長〕
最初はいいんですけれども､慣れてくると学習して､枝がちょっと垂れていたりすると、それを利用して飛び越えて来ちゃうんですよね。電線を渡って来るとか。

〔参加者〕
あと鶴峠のＪＴの森に、ブナの木とかもみじなんかを植栽したりする活動も春と秋、年に２回やっているんです。
そういう森にやがては実がなったりすると、猿や小動物もそれを食べて、里には下りてこないかなと・・。

〔知事〕
本当にそうですよね。やっぱり山に、山ブドウとかアケビとか、ああいうものがたくさん生えるようになると、里に下りてこないだろうと思うんだけども。なかなか簡単にはいかないですね。

〔森林整備課長〕
今、県有林なんかは、木を植える場合は必ず広葉樹を１割か２割混ぜるようにしておりますし、間伐をする時も、自生している広葉樹、例えば栗だとかドングリだとか、そういったものを残すと。場合によってはむしろ杉だとか桧を切っても、広葉樹は残すというようなことで、そういった努力もしているところです。

〔知事〕

色々な対策を一緒に打っておくしかないですよね。管理捕獲の予算はずいぶん付けてありまして、猟友会の皆さんは嫌がりますけれども、そうも言ってられないものですから、やろうと思えば出来るんです。しかしそれはまた批判も出てきますしね。

難しいですよね。そうですね、一番大きい問題で、これはもう全県下みんな同じ状況です。

〔参加者〕

私は小菅村に住んで３年になります。１歳と４歳の子どもがいて、地域の子育て活動に参加している立場から､子どもの食生活についてのお話を申し上げようと思って来ました。

小菅村のお母さんたちだけでは人数が少なくて、なかなか活動しづらいものですから、上野原市とか大月市、都留市などのお母さんたちと一緒になって活動をしているんです。１１月２２日に上野原市のもみじホールで､「粗食のすすめ」というベストセラーを書いた幕内秀夫さんという栄養士の先生の講演会を予定していて、その準備をしているところです。

なぜ上野原市かというと、小菅村では１００人以上集めるというのは難しいということと、そのほかにもう一つ理由があります。

幕内さんが「粗食のすすめ」を書いた原点は、上野原市の棡原という地区の長寿食の文化、雑穀とかを中心にした、その文化に着目して、それが子どもに食べさせるものとして相応しいものだと、そういうことなんです。単純に昔がいい、昔に帰れという発想ではないんですけれど、今食生活が欧米化して油過多になっている。そして子どもたちが健康を害しているというので、食生活をご飯を中心にした和食にすれば、国内の物を食べられるし、砂糖や油類とか、そういうものを減らせるということなので、できるだけ子どもたちに、ご飯を中心にした食生活を進めていこうと、まあ強制はできないんですけれども、そういう活動をしています。

こちらでは粉食文化として、すいとんとかお饅頭とかありますし、あとお漬物とか、私小菅村に引っ越してきて、手作り文化の高さにはびっくりしたんですけれども、そういういいものがありながら、子どものおやつイコールお菓子、お菓子が一番喜ぶ、という方程式がお年寄りの中にもがっちりとできてしまっていて、もったいないというか残念というか、せっかくいいおやつ、いい食生活というのがあるのにな、という気持ちからここでそういう運動をしています。

田舎ですから、ファーストフード店とかコンビニから隔離されているのは、子どもにとっていい環境だなと思っているんですけれど、それだけではなくて、田舎だからこそできる素朴な食生活で子どもたちが健康に育つということを、田舎の良さとして、もっと前面に出していったらいいんではないかなと思っています。

それを家庭からやるのはすごく難しいので､学校給食をお米を中心にして欲しいんです。今米飯給食は週３回とか、上野原でも４回くらいだと思うんですけど、週５回完全米飯給食にしてもらいたいんです。学校給食でするということは、教育として子どもたちに食べるべきものを教えていくということだと思うんです。例えば算数が嫌いだからといって、算数を教えるのをやめましょうということにはなりませんよね。子どもが喜んで食べるも

のだけを出すのではなくて、食べるべきものを学校給食で・・。

〔知事〕
本当にそうですね。学校給食も少し考えなければいけませんね。まあ小麦がずいぶん高くなってきましたからね。お米で作ったパンというのがありますよね。あれおいしいですよね、ちょっと高いんですが。かなり小麦のパンと匹敵するようになってきましたね、安くなってきてね。

〔参加者〕
それに助成をしようという話も何か自民党の中にはあるみたいなんですけれど。でも結局それは、お米をお米として食べないで、パン食文化を残すことになるので（笑）。米粉パンに合うのはやっぱり油が多い洋食のおかずになってしまうので、お米として食べるという文化を子どもたちに、という活動をしています。

〔知事〕
いや、いいご意見ですね。

〔参加者〕
私は丹波山村で子どもの読書推進をやろうということで、お母さん方とお話の会というのを作って活動をしています。そんなことから新しくできる新県立図書館について、とても関心を持ってニュースを見ているんですけれども、やはりこんな僻地にいると、新県立図書館ができてどのくらいいいことがあるのかな、というのが正直なところです。
子ども読書支援センターもできるということで、期待はしているんですけれども、連携すべき市町村図書館がないので、こういう僻地に向けてはどんなことを考えて下さるのかということをお伺いしたいと思います。

〔知事〕
今色々考えているんですけれどね。例えばインターネットでも、あるいはファックスでも何でもいいんですけれども、こういう本をというようなご希望があれば、例えば役場まで定期的に送ってくるとか、こちらの地域でも県立図書館の本を借りられるように。今１００％それができるかどうかというところまでは申し上げられないんですけども、できるだけ県民の皆さんが新しい県立図書館の蔵書を活用できるように、そういう仕組みを今考え始めているところなんです。
できれば皆さんから希望がございましたら、多少時間は掛かるかもしれませんけれども、図書館の本を借りられるようになれば一番いいと思いますよね。そういうようなことも考えたりしなければいけないと思っているところなんですけどね。

〔参加者〕
不可能かもしれないんですけども、移動図書館が１年に１回来るとか・・。

〔知事〕
　移動図書館がね。１年に１回じゃ、しかし困るでしょうね（笑）。１週間に１回ぐらい来ないと。移動図書館というのも今なくなりましたね。全国的にやっている所はあるでしょうかね。

〔参加者〕
　例えば甲府市とか、各市町村の中での子ども向けの移動図書館というのはあると思うんですけれども、一般の大人向けというのはちょっと聞かないですね。

〔知事〕
　そうですね。まあこの地域の皆さん方も、県立図書館が何らかの形で利用できるように考えていきたいと思います。

〔参加者〕
　よろしくお願いします。

〔参加者〕
　丹波山村に来て６年経ちます。
　ここには高校がないので、行くとしたら塩山の方なんですけど、通学は困難なので家を借りるんですね。でも家賃が高いんです。大体４２，０００円くらいで１Ｋ、小さい所に住んでいるわけです。

〔知事〕
　それはアパートですね。

〔参加者〕
　本当に大変なんです。食費もかかりますし。そして二人になって、もっと大きい部屋を借りるとなるとさらに大変なんですね。
　経済的に親も大変なので、何とか県の住宅を優先的に安く提供して欲しいと思います。あと山梨には、大学、短大、専門校などの教育機関が少ない。みんな東京とか埼玉とか、ほかに行っちゃうんです。だから山梨にも、もうちょっと教育機関を増やしてくれれば嬉しいなと思うんですよね。
　そしてあとは、若い人を戻す何かいい方法を考えていただきたい。子どもたちを戻さないといけないです。ちょっとどうしていいか分からないですけど。

〔知事〕
　今、丹波山村から、例えば塩山なんかの高等学校に行っている子どもたちというのは何人ぐらいいるものですかね。

〔参加者〕
今２０人ぐらいいるのかな。

〔知事〕
２０人ぐらいですか。大体塩山に行くんですか。奥多摩に行く人はいない。

〔参加者〕
ここからは奥多摩は行けないんですよ。奥多摩は東京都ですから。住所を移さないと都立には入れないんです。私立の学校なら行けますけど。

〔知事〕
親が住所を移すしかないですものね。

〔参加者〕
そうです。それも困るんです。

〔知事〕
県営住宅というのがあるんですが、大体は一杯なんです。子どもさんの、要するに昔で言えば寮ですね、そういうふうなものですね。なるほど、そうですか。何かうまい方法があるか考えてみましょう。

〔参加者〕
私は丹波山村出身で丹波山村に帰ってきた一人です。丹波山村に若い人が少ないということで、その原因は２つぐらいあると思っています。
一つは職がない。私も職がないから帰ってくることに抵抗はあったんですけど、だったら自分で作ればいいと思って、小さい会社なんですけども二人で法人を設立して、観光をメインにした活動をしています。
丹波山村、小菅村に観光しに来るお客さんも、友達もなんですけども、ここを奥多摩だと思っている人が多いのが現状です。山梨が今観光に力を入れて、盛り上がってきているところなんですけども、全体として、山梨として観光が成り立っていないんじゃないかと、そこはちょっと不安に思っているところです。
先ほどの続きで、もう一つ若者が帰ってこられない理由というのが、多分地域に誇れるものがないということじゃないかと思うんです。私は大学へ行くのに東京に出たんですけど、地域の人に、大学に行ったのにどうして帰ってきちゃったの、と言われたことがあって、悔しい気持ちもありました。
帰ってしまったら負けというか、外で普通の職に就いた方がいいとか、もっと誇らしい職があるんじゃないか、そういった視点はあると思います。
だけど丹波山村や小菅村の、こういういい素材や、いい自然がある所に、ちゃんとした観光のルートが敷いてあれば、そこから一つの会社を起こすこともできるし、若い人たちも自分の思ったことができて、生活ができて、お客さんにも売れて、という環境が作れる

と思うんです。そのためにはやっぱり丹波山村、小菅村も含めて知名度を上げることが必要だと思うんです。

高校は甲府でしたけど、丹波山村を知っている人はクラスに一人もいませんでした。これは丹波山村や小菅村ががんばることだと思うんですけど、周知してもらえるような、何かルートがあれば、もうちょっと変われるんじゃないかと思いました。

〔知事〕

だけど、東京の人から見ると多摩源流なんていうのは非常に魅力がありますよね。だからＰＲというか、情報発信の仕方で相当周知できると思いますよ。ここに何万人も来られても大変だと思うけど、例えばインターネットとか、ホームページか何かに載せるとか、そういうことはやっていますか。

〔参加者〕

自分たちでは立ち上げていないんです。今のところは知り合いとか、そういうところにリンクして貼り付けてもらったり、そういうことのみです。

〔知事〕

何かホームページを作ればいいですね。県のホームページに載せられましたっけ。

〔観光振興課長〕

情報ボランティアになっていただければ、地域の面白い話、例えば今度こういうお祭りがありますとか、新しい商品、新製品で、みんなでこういう物を作りましたよとか、そういった情報は充分載せられます。今県のホームページには、月間１００万ページビュー、これは１００万枚のチラシを配っているのと同じという状況になりますし、メルマガの会員が１万人を超えていますので、そういった意味では是非とも丹波山村、小菅村からもそういう面白い情報を寄せていただければ、それがトータルで山梨の魅力になっていくということですので、是非ともご活用いただきたいと思います。

〔知事〕

丹波山村はもちろんホームページを持っているわけですから、例えば観光をやっておられる方とかが載せることはできるんですか。

〔丹波山村総務観光課長〕

観光協会としてはできます。

〔参加者〕

私も知名度が低いと思っています。あの「ザ・やまなし」、あれは県の広報の雑誌なんですか。

〔司会〕
　県が監修しています。山日が制作しているんです。

〔参加者〕
　見ていると、郡内、特に丹波山村、小菅村の記事って本当にないんですよね。とにかくこの地域を知ってもらうことがすごく大事だなというふうに考えます。そんな中でやっぱりそういう支援も必要だと思います。
　今お話に出た広報ボランティア、それはどういうルートでなることができるんですか。

〔観光振興課長〕
　「富士の国やまなし観光ネット」というのがあるんですけども、そこから自分で申請できるようになっています。ですから是非ご覧ください。

〔参加者〕
　是非拝見します。丹波山村、小菅村ではそれがゼロということですよね。
　村のほうに協力を得て、自分たちからも発信していくことが大事だと思うんですね。それぞれの村にもホームページがありますけども、やっぱり人の目に多く触れる、そういう雑誌なり新聞なり、いろんなメディアを使って村を発信していくということが大事かなというふうに思います。
　私、生まれは上野原市西原なんですけども、ここに住んでみて、さっき知事さんがおっしゃったように、本当に人気（ジンキ）、人の気がいい所だと思うんです。そういう中で生まれた、食文化しかり、いろんな伝承芸能しかり、いろんな文化がありますので、いろんな方法で発信するように私も努力していきたいなというふうに感じました。

〔知事〕
　そうですね。私の友達で、青梅周辺に住んでいた人がいて、こっちが好きで、日曜になれば必ず来て、小菅の湯に行ったり、丹波山村の「のめこい湯」に行ったり、本当に毎週こっちに来ている人がいましたね。非常に近いし気持ちがいいと言って。都会の人にとっては非常に魅力があるんですよね。だから情報が発信されれば、そういうことが好きな人っていうのは大勢いますから、来るんじゃないでしょうかね。
　この間ＪＴＢの社長さんに会って話をしたけれども、観光も昔の観光じゃないですよね。エコツーリズムみたいなものであったり。今ＪＴＢが盛んにやっているんですけど、観光を開発する時に、まずその地域の人たちに「日常生活で楽しいことっていうのはありますか」と聞いて、「私はこの村でこんなことをして楽しんでいます」と言ったら、「それだ、それを売り出そうじゃありませんか」と。「都会の人はそういうことを望んでいるんですよ」と言うんですね。例えば蜂の子を採りに行ったりとか、色々ありますよね。そういうものが観光になるんです。色々な素材が観光になってきますから、そういうものを発掘して、ＰＲの手段というも色々ありますから、そういうものを使っていただくことが大事なんですね。多摩川源流大学も色々知恵を出していただけるでしょう。

〔参加者〕
　はい。皆さんにお配りした後期講座と書いてあるこちらの冊子なんですど、これは農大が一般向けに行っているエクステンション講座です。今回は小菅村の方に協力していただいて４コース作っています。食のコースとか、山を歩くコースとか、猟師さんと一緒に歩くコースですとか、コース自体を小菅の方と東京の方と一緒になって考えようというコースですとか、そういう新しいタイプの提案が何かできないかなということで、今年の秋から始めます。是非山梨県の皆さんにも広報していただけたらと思うんですが。

〔知事〕
　これ、ずいぶん講座がたくさんありますね。
　この中でこの源流大学はどこに出ているんですか・・４８ページですね。

〔参加者〕
　源流大学のコースがたくさんありまして、小菅の方には無料で参加していただけるようにしています。先程の誇りの問題だと思うんですけど、自分の村にどういう魅力があるかということを、村の人自身がよく理解していないと、観光も難しいと思います。そこを分かっていただくために、一緒に楽しんでいただく、さっきの交流の話もありますし、いろんな提案ができるように・・。
　やっぱりこれからは多様な人たちが一緒になって作っていくというのが必要かなと思います。都市と農村の交流は今まで多く言われていたんですが、農村と農村ももちろん交流していかなければいけないし、色々な人たちが入って、色々なことをやっていくということが必要だと思うんです。
　そしてただ人が入って来るだけではなくて、質を上げていくとか、入って来る人が村づくりに参加できたり､山梨県のいろんなことに参加できるということも大事だと思います。源流大学でも色々提案させていただいていますので、そちらのほうもよろしくお願いします。

〔知事〕
　大勢人が来るでしょう。

〔参加者〕
　それはもう。源流大学は今年が初めてなのでちょっと周知が遅れているんですが、ほかの地域のものは、もう受付開始２０分で締め切りになってしまうものもあります。東京の人たちもすごく興味があって。

〔知事〕
　そうですね。

〔参加者〕
　僕は村に来て丸２年ぐらいになります。

東京学芸大学を出て、現在ＮＰＯの仕事をしています。学芸大と小菅村で連携協定を結んで、今は公民館に博物館を作る準備をしています。歴史的なものを後世に伝えるための授業ですとか、雑穀の栽培、普及、そういったものの保存ですとか、また生きた文化として村の中に残していかなければならないということで、お手伝いさせていただいております。

また、本来のＮＰＯの仕事としては、子どもたちのキャンプ活動をして、環境学習をしたり、自然体験をしたりですとか、そういったことを中心に行っております。

観光資源と言うお話がありましたが、自然の楽しみ方を皆さんに知ってもらって、何度も足を運んでいただくような、そういう仕組みが必要なんだというふうに思っています。それには多くの指導者というか、観光ガイドができる人間、そういった人間が必要になってくるというふうに思っています。

やはり６０代、７０代、８０代の方がいろんな事を知っている。でもその人たちにとっては至極当たり前のことなので､それがすごいことだということが分からないんですよね。そういうことをほかの人にうまく伝えていくような役割の人、ガイドですとか、指導者ですとか､コーディネートする人間というのが必要になってくると思います｡まず地元の人、そして学芸大も学生が何人か来ていますけど、そういった中から、一人でも二人でもそういう人が出て来てくれれば。

観光と山村振興の両方が理想的な形で存在する村にするためには、昔から続いてきた炭焼きとか、食文化とか、そういう伝統的な資源を継承していくことが大切だと思います。地元の人も何とか継承しようとはしていますけど、人が減ってきていますので、外からもどんどん入ってきてもらって、たくさんの人に広めることと、その中の何人かがもっと食いついてきて、小菅ファンや丹波山ファンになって、年間通じて何度も足を運んでもらえるようになるといいのかなと思います。

〔知事〕

そうですね。本当に都会には今や膨大な量の田舎志向というか、そういう気持ちをもった人がいて、もちろん田舎に住んでみたいという人もいるし、また田舎で何か、例えば間伐に参加してみたりとか、あるいは農業をしてみたいとか、いろんな形で田舎と係わりたいという膨大な需要があるんですよね。

北杜市に増富という温泉がありますけれども、その奥の奥の、この地域よりもっとずっと不便な所に、そんな所に三菱地所が関心を持ちまして、そこに畑を借りて、社員が来たり、また三菱地所に住んでいるマンションの住民たちにそういうニーズがありますから、そういう人たちが来て畑を耕したり、そんなことをするような動きが出てきたりしています。

都会にはやっぱりそういうニーズがあるんですよね。そういうニーズをどうやって引っ張ってつなげてくるかということが非常に大事なんですね。そういうことを県ももちろんお手伝いをしなければいけないと思うんですけどね。

ところで東京農大とか学芸大学という大学が､どうしてこの小菅に注目されたんですか。

〔参加者〕

そこはやはり人の縁なんです。古くからこういう伝統の調査のフィールドだったというのが大元のきっかけなんだと思います。奥多摩、秩父、こういった多摩・甲斐といった所の、いわゆる伝統的な暮らしをしていて、食生活だったり、農産物だったりというのが残ってきた場所。特徴が見当たらないとか、知名度が低いというのは、かえって何か目だったものがないから、そういう伝統的なものが残りやすかった土壌なのかなというふうにも思います。開発が入らなかった分、どうにか人が入ってきて欲しいというのが、地元の人、役場の人もそうですけど、いろんな人の願いだというのは僕にもよく分かりますし、僕自身も受け入れてもらっているという気持ちがすごく強いので、そういった人たちに少しでも恩返しといいますか、一緒になって村を盛り上げるようなことができたらなと思っています。

僕は今、放課後の子どもたちの勉強を見ていたりとか、学校に理科の支援員という形で入らせていただいていて、村の子どもたちと係わる機会が最近多くなってきているんですけど、子どもたちに対しても、都市部の子どもたちと同じ教育水準でやってあげたいというところもあります。もう一方で村の自然だとか、子どもたちに村の良さというんですかね、そういったものを伝えられるようなことをしていけたら、先ほどお話にもでましたけれ、ここに戻って来ようと少しでも思ってもらえるのかな、と常々感じております。

〔知事〕

それはありがたいことですよね。特に最近は非常に理科離れが進んできていますからね、これは非常に問題だと思うんです。あなたのような知識のお持ちの方がそういう支援をやっていただけると、これは心強いですよね。

〔参加者〕

私は１５年ほど前に丹波山村に参りまして、１３年間村の資料館に勤めておりましたので、村の方のお話をゆっくり聞く機会がありました。

山に関して言うと、６５歳以上の方は先生レベルの知識を持っております。でもその人たちが今はほとんど活かされていないということを感じますね。

例えば、丹波山村に、もっと税金を使うお話になっていくんでしょうけれども、小、中、高、大学に繋がるような、森を守るという教育ですね、そういう教育機関を作っていただきたいと思います。

この辺は非常に東京からも近いですし、日本列島の真ん中ですし、地層的なものも、資源的にも、すごく面白いものがありますので、そういう場所をいかして、６５歳以上の人を先生に入れながら、学者を中央から招く。そして丹波山の子どもたちを最優先で育てながら、外からの子どもたちをここで森と結び付ける。人間を再び森と結び付け直すという作業は、いくら私たちが頑張っても難しいんですよね。

丹波山村の子どもたちと甲府なんかへ遊びに行きますね。バスに乗って、２０何人ぐらいですけどね。博物館とか科学館とかに着くと、バスの名前、丹波山村という名前を隠せと言って、手を繋いで隠すんですよね。この子どもたちはまだ村に誇りを持っていないんだということを思いました。

村の人は「何もねえ、何もねえ」と、こういう言い方をする。でも私はここに来て、村に宝がいっぱいあることを強く感じているので､まずこの村の子どもたちをと思いまして、村の子どもたちと少しでも係われるような活動を少しずつしております。

最近、甲府のほうのＮＰＯ法人の方たちと交流がありまして、あなたが面白いと思った所だけを集めて村の中を歩いてもらいたいと言われたんですね。そしたら４４人集りまして、大型バスで来ました。１７人キャンセル待ちという状況のようで、スタッフも５人入りました。

〔知事〕

あなたが面白いと思う所を連れて歩いた・・面白いですね。

〔参加者〕

１００％任せるから、あなたが面白いと思った所を回ってくれということで、それで回ったんです。子どもたちも私の話を聞きながら、もう村の河原のキラキラ光るものをさっとすくってきて、ぱっと持って来たりして。子どもには伝わるんですね。非常に面白かったです。そういうことがありました。

ここ２、３年は、中学校から総合学習の時間の手伝いをして欲しいということで、村の歴史とか、大事なことを子ども達が感じられるように手伝いをしています。昔のお話、お年寄りがいろいろするお話しを集めて、創作して、お母さんたち、お父さんたちも参加してもらいながら紙芝居を作りました。

題は「自由民権とタツの恋」、これは今年つくったお話なんです。１２０年くらい前のお話しです。お年寄りがそのころの言葉をぷつぷつって言うんですけど、何のことだかよくわからないと言うので、それを調べて、一つのお話にして、それをまず村の中学生にしてあげました。そしたら村のお年寄りも聞きたい、そして筑波大の社会科学の学生がここに演習に来ているんですが、その先生も授業でやらせてくれと。

去年は、丹波山の金山の話を、中学生、小学生に教えてあげたいと思って、それを紙芝居にしました。授業でやって、あっちでもこっちでもやって、甲府から来た５０人弱の方たちにもこの紙芝居をやって見せました。みんな喜んで、また丹波山村に来るツアーを作りたいというようなことで帰られたんです。そういうふうに子どもたちに、丹波山村の豊かさを伝えたい。

小菅村でも色んな活動をやってらっしゃるんですよね。色んな人の意見を聞いて､「俺が責任持つ」というような、リーダーシップを取る方がいらっしゃるなということを感じているんですよ。丹波山村も豊かさを途絶えさせたくない。何とか今のうちに繋げたいと思っているんです。

〔知事〕

今おやりになっていること、またお考えになっていることというのは非常に大事なことだと思うんですよね。市町村合併が進んできたでしょう、まあ丹波山村もそういう話があって、長い目でいくとやはり将来的には恐らく甲州市に合併するような格好になっていくと思うんですけれども、そうすると益々この地域色というのはうすれてくるんですよね。

その地域のコミュニティや、地域の昔ながらに残されてきたいろんなものというのがうすれていっちゃうんですよね。それが市町村合併の欠点でもあるんです。

私なんかも北巨摩のほうの出身ですけれども、北巨摩も北杜市という市ができました。昔ながらのいい村や町があって、それぞれその地域その地域、大事に自分たちで町づくりをしていたわけですけれども、そういうエネルギーとかそういうものがうすれちゃうんですよね。しかし市町村合併は長い時代の流れで、これはやむを得ないことなんですが、それを補っていくものがなければいけないと。

それはやはりＮＰＯ活動とか、地域の皆さんが、自分たちの地域を自分たちの力で大事にしていく、創っていく、守っていく、そういう動きだと思うんですよね。そういうものを大事にしなくちゃいけないですね。

県もそういうものを応援していきますけど、しかし余り行政がしゃしゃり出て、じゃあ補助金付けました、どういうふうにしますからなんていう話ばかりすると、また画一的になっちゃうし、おかしくなるんです。ＮＰＯのいろんな活動については支援措置というのがあるんですが、是非がんばってほしいですね。そういうがんばる中で何か県でやれることがあればおっしゃっていただければ・・。森の教育機関を作れというのは、中々大変ですが・・。

〔参加者〕

１年ぐらい前に知事さんが、合併が進んでいくと、地域のそういった豊かなものがうすれていくということをおっしゃっているということを耳にしたんですよ。それでちょっとお話したら通じるかなと思ってお話しました（笑）。そういう文化的なことを発言していただくだけでも、私たちの力になりますので・・。

〔知事〕

合併等に対して、一方では進めなければならんという思いがあるけれども、しかし進めていいのかなという感じもありますね、正直言って。しかし大きい流れはそういう流れですよね。であるが故に、そういう地域を大切にしていく運動というのが、同じように盛り上がっていくことが大事だと思いますよね。いい話をありがとうございました。何か応援できることがあればやりますからおっしゃって下さい。

〔参加者〕

私は小菅に来てもう７年になるんですけれども、この土地が気に入ったということもあって、今年家を建てまして、永住する覚悟を決めたわけなんです。ただ子どもが今中学２年生で、子どもの進路を考えたり、今まで育ってきた過程を見ると、ここに来たことで、子どもの将来の可能性をいろんな面で潰してきたのかな、というのは正直なところありまして・・。

〔知事〕

なるほどね、親の気持ちとしては分からなくなりますよね。

〔参加者〕
　そうですね。自分たちは自分で判断できる年になってからここに移り住んだからいいんですけれど。教育の機会というのがどうしても都市部と平等ではないですよね。それが丹波とか小菅の地域の子どもたちにとっては、これから先大きな問題になっていくんじゃないかなと思います。
　先ほどからいろんな方がお話されていたんですけれども、間近なこととしては、高校に入る時にどうするかという問題があります。実際今小菅では簡易住宅によそから大勢入ってきています。東京や、県内の他の地区から来ているんですけれど、皆さん子どもが小さいうちはいいんですけど、小学校高学年、中学になるぐらいになると、お兄ちゃん、お姉ちゃんが高校にいく時一緒にここを出ちゃおうか、という方が多いんですね。高校に行くのに上の子だけ下宿させるんだったら、みんなで一緒に、という方が多いんです。
　昔は寮があって、僻地の子は寮に住んで、そこからいろんな学校に通っていたんだよなんていう話を聞くと、今もそういう寮があれば親も安心できるし、村を出ていこうという選択をしないでもすむのにな、という思いがあります。
　村では上野原高校へ通学するのにバス補助を出して下さっているんですけど、みんながみんな上野原高校に行きたいわけではない。みんな希望の進路があるので。あと都立高校に行きたいので、東京に籍を移しちゃうという方がすごい多いんです。
　これはちょっと無理でしょうけど、丹波・小菅の地区の子は、ウルトラＣで都立も入っていいよというような、そんな取り決めが東京都とできたらいいのにね、なんていう話もあります。

〔知事〕
　そうですね、都立高校にね。石原知事と話してみましょうか（笑）。

〔参加者〕
　私たちがそういう話をしてもなかなか進まないんですけど、行政レベルでそんなことができればなと。

〔知事〕
　昔は本当に寮があったんですよね、おっしゃるようにね。今は寮ってないんですかね。

〔参加者〕
　今は聞かないですね。

〔参加者〕
　昔は甲府と、それから大月なんかに寮があったんです。我々の頃はみんなそこに入ったんです。

〔知事〕
　結局それは使われなくなったから閉鎖したんですね。

〔参加者〕
　そうですね、人数が減ってきたということもあります。

〔参加者〕
　実際山梨には僻地があるわけじゃないですか。だから規模を小さくして。需要はあるんじゃないかなと思うんですけれど。

〔知事〕
　まあ行政的に見ると、寮を造るよりは、それに必要なお金を補助するほうが安上がりなんですよね、できるかどうかはともかくとしてね。

〔参加者〕
　それでもしていただければありがたいです。賄いで下宿をしてくれるという家も減ってきてしまっているみたいで。

〔参加者〕
　私も今中学校１年生と小学校６年生、４年生と３歳の子がいるんですが、子どもが中学生になって高校の問題が現実味を帯びてきました。富士吉田市は４校ぐらいまとまって高校があるじゃないですか。甲府にもまとまってありますよね。そういう高校がまとまってあるところに、下宿する場所があったらとは思います。

〔知事〕
　なるほど。

〔参加者〕
　自分は奥多摩出身なんですけど、いずれ多摩源流市という形で小菅村、奥多摩、丹波山村で一つになって・・。是非一つの市としてやって行けたらなと。

〔参加者〕
　山梨県は中心部から約１時間弱ぐらいでいろんな所に行けるように、交通の便を重視していただいていて、丹波でも国道４１１号線がすごく走りやすくなりました。あの時、トンネルを掘ってくれれば早いのにと思ったんですよ。冬場も雪で大変な時期がありますし・・。

〔知事〕
　柳沢峠をですね。

〔参加者〕
　そうです。でもあの道を通りながら富士山を見られる、そういう構想もあったんじゃな

いかという話を聞いて、なるほどと思いました。
　先ほどから山林のこと、河川のこと、色々お話が出ましたけれども、河川なんかも、昔は地域の子どもたちが飛び込める淵があったり、小さな魚と遊べる淀みがあったりしたんです。
　今その河川に、だんだん昔の面影がなくなってしまったのがすごく残念です。都会から来てくださる家族連れにしろ、若い方たちにしろ、そういう整備されていないというか、整備されていてもそうは見えないような環境の中で、自然を体験できるというのがすごく素晴らしいことだと思うので、もし整備をしていただく場合も、もっと環境を考慮した上でやっていただけたらありがたいです。

〔知事〕
　丹波山の川なんかずいぶん使いやすい川があるようですけどうまくないですか。遊べないですか。

〔参加者〕
　昔は子どもたちが飛び込んで遊べるような淵があったんですけれど、水の流れがどうとかということで、段々コンクリートで固められちゃったりとか、そういうことが結構多くなっているんですよね。ですから川は、ただ流れる川ではなく、自然を体験できるような川であって欲しいと思います。
　先ほど知事さんから、合併で地域の良さ、伝統のある良さというものがうすれていくというお話を伺って、あっ確かにそうだと思いました。地域の勢いが失われていけば、それに伴って人口の流出もあるし、小中学校の統廃合もでてくる。合併で統廃合されている学校はずいぶんあると思うんですよね。それがまた逆効果になって、地域が衰退していくんじゃないかという不安をすごく持っています。ですから合併に関しても、行政と県とで、押しつけじゃなく、住民の意見をしっかり聞いた上で、常に向き合っていただきたいというのが希望です。

〔知事〕
　おっしゃるとおりですね。

〔参加者〕
　丹波山に住んで３年になります。私も無農薬の野菜を作って生活を楽しんでいます。
　来て満足はしているんですが、ただ働く場が、仕事があればもっともっと人口は増えると思うんですが、それがないのが残念です。

〔知事〕
　そうなんですよね。

〔参加者〕
　私は１４年丹波山に住んでいます。都会にも近くて、また古い所が残っていて、とても

いい所なんですけど、やっぱりどうしても車で移動しなければならなくて、今ガソリン代が高騰しているということもありますけど、役所に行くにも負担が大きいわけですね。

〔知事〕
車代とかそういうことでね。時間もね。

〔参加者〕
どこか行くのにも一日がかりという感じなので。免許の書き換えとかも一日がかりです。２カ月に一遍でいいので来て欲しいなと思いますね。

〔知事〕
今、免許証の交付とか、移動でやってくれるところがあるんですか。

〔参加者〕
知らないですけど（笑）・・。来て欲しいですね。

〔参加者〕
私は丹波に来て２１、２年になります。
丹波・小菅はどこに行くにも遠いですよね。やりたいことがあるとどうしても都会に出て、一人暮らしをして、ということになるので、そういうところも考えていただきたいと思います。
私も村の方たちに助けられてここまで来ましたので、今度はこちらに来た方をサポートしたいという気持ちでいっぱいなんですけれども、どんどん人が少なくなって、何かやろうと思ってもメンバーがいないんですよね。年配の方に元気を出していただきたい、元気付けられるようなことが何かできたらいいなと思って、できるだけボランティアなんかには、お手伝いに出ているんです。
最近は経済面で難しくて、あれもだめ、これもだめになってきていますよね。もうちょっと年配の方が楽しめることがあったらいいなと思います。

〔知事〕
そうですね。なるほど。

〔参加者〕
この地域にはさきほど言っていたように仕事もなかなかないんですが、若い人たちがたくさん帰ってきてくれまして、伝統芸能に力を入れていて。獅子舞なんですけれども。

〔知事〕
帰ってきてくれるんですか、その時だけということでなくて・・。

〔参加者〕
結構村にもいますし、その時だけ帰ってきてくれる子たちもいるんですよ。
「ささら」ですか、昔踊った踊りをまた復活させて踊ってくれたりしているところなんですよね。そういう若いパワーを、少しでも村の中で活躍できるような場を、私なんかもそうですけど、村の行政でもまた考えてもらって、もっともっと若い人たちが増えるような環境をつくってもらいたいなとすごく思います。
それには私も努力しなければいけないし、もちろん子どもたちもそうですし、地域の方たちの力を得ながら、そういう温かく見守ってもらえるような方向へ持っていっていただけたらいいなというふうに思っています。

〔知事〕
そうですね。

〔参加者〕
去年結婚して小菅に住み始めました。
住んでみて思ったことは、皆さんおっしゃっていますが、人がいいし、楽しいし、村営住宅は家賃が安いし、住みやすいです。子どもたちもなついてくれまして、放課後子ども教室というのをやっていて子ども達と仲良くなったんですが、夏は飛び込みをしたり、キャンプしたり、歩いていたらみんな寄ってきてくれて、飴をくれたりとか（笑）、今すごく楽しいです。この１年の間に丹波山と小菅とこの地域に慣れようといろんなことをしていて、これからの季節はきのこ採りがあったり、すごく楽しみです。
私は栄養士なんですけど、今直面しているのはやっぱり就職の問題です。小菅の中で栄養士として就職するのは多分無理で、青梅まで出るか、塩山まで行くかということになると思います。青梅のほうが行きやすいし、選択肢も広がるので、多分私も青梅まで１時間、２時間かけて車で通勤するんだろうなと思います。でも大学を卒業してこちらに戻ってくる人にとっては、それはすごい負担になるんだろうと思います。
２時間車で通勤すると言っても、満員電車の２時間と、この緑の森の中を、悠々自適に渋滞もなく行くというのは全然違うことだなと思って、前向きに考えてはいるんですけど（笑）。

〔司会〕
それでは知事さん感想を含めてお願いいたします。

〔知事〕
皆さん本当にそれぞれこの地域を愛しておられて、特に県外からおいでになった方はこの地域が本当に好きで、この地域に長くお住まいいただいて、それで少しでもこの地域をよくするように、いろんな努力をしていただいているというのを改めて感じたんですけど、しかしそういう中にあって、日本全国過疎の地域ではみんな同じなんでしょうけれども、やっぱり子どもの教育の問題、自分自身の仕事、職場の問題、また子どもがこちらに帰ってくるにも就職の機会がない、そういう問題にみんな悩まされているわけですよね。

県としても何かできることをやりたいと思うんですけれど、甲州市に、産業技術短期大学校というのがあるんですよね。県がつくった専門学校です。定員割れしているんですけれど、卒業の時にはもう４倍、５倍の就職申し込みがあるんですよね。すごい倍率なんです。だからここに入ったら、県内でいい所に就職できるんですけどね。

例えば観光学科でいえば、甲府の富士屋ホテルだとか、石和の温泉ホテルだとか、あるいは情報関係ですといろんなソフトウェア会社とか、あるいは機械だとか電気とか、そういう学科であればかなり先端的な企業がありますが、そういうところにみんな就職できるんです。

だけどもみんな余り行かないんですよね。まあ知られていないということもあるんですけれどもね。東京の専門学校なんかに行くよりもはるかに就職率は高いし、給料もいい所に就職できるんですけどね。そういう機会もあることはあるんですよね。だけど山梨の人はやっぱり東京志向が強くてね。

〔参加者〕

最近は種類というか、分野が広くなっていて、うちの子は動物飼育のことを・・。

〔知事〕

そういう専門分野でね。そうなるとそういう専門の学校が必要ですね。

〔参加者〕

どうしても自分で選ぶ範囲が昔と違って広くなっているので。

でも子どもが言うには、山梨の子たちは東京とか専門学校に行っても、将来山梨に帰りたいという子どもが多いんですって。

うちの子は動物飼育を専門としているんですが、丹波に帰ってきて就職できるかというとできないんですよね。だからそれを考えると、丹波に帰りたくても仕事がないから帰れないという、そういう問題が多いのかなと思います。

〔知事〕

難しい問題ですね。そういうこともあって人は減っていくとしても、減っていく分、例えば若い方々が、東京農大とか学芸大学とか、あるいは筑波大学とか、そういう若い人たちがここに入ってきて、ここにずっと住むわけじゃないかもしれませんけれども、また人は変わるかもしれませんけれども､いつもそういう若い人が外からどんどん入ってきたり、あるいは観光客でももちろんいいんですけれども、そうやってこの地域の賑わいが維持できるということであれば、それはそれでいいと思うんですよね。またそれを目指していくしかないんでしょうね、きっとね。

皆さん方いろいろ努力をしていただいて、本当にありがたく思っております。県もそういう皆さん方を何とか応援できるように考えてみたいと思っております。動物の関係の就職先を作るいうのはなかなか（笑)、できることとできないことがありますけれども、皆さんの本当に切実ないろんなご意見を承りまして、本当にありがとうございました。大変に勉強になって、何とか皆様方のそういう希望が少しでも叶えられるようにこれからも努力

をしたいと思っております。本当にありがとうございました。

〔皆で〕
　ありがとうございました。（一同拍手）

〔司会〕
　どうもありがとうございました。
　皆さん、言い足りないことが多分あると思いますので、村を通じてとか、また私ども広聴広報課に何でもおっしゃっていただきたいと思います。それでは今日は終了いたします。どうもありがとうございました。